

【資料紹介】

大井谷Ⅱ遺跡の防長型土師器 高橋 周

1. はじめに

出雲弥生の森博物館では、2010年（平成22）10月23日～1月10日にかけて『ミニ企画展』「出雲を掘る 第一話―出雲市発掘成果展―」と題し、出雲市が発掘した遺跡で今までに公開の機会が少なかった出土品を展示した。その中に、出雲市上塩冶町に所在する大井谷Ⅱ遺跡の出土品があった。展示に際して、同遺跡の出土品について再整理を行ったところ、中世の土器のなかに防長型土師器碗が含まれていることが明らかとなった。

防長型土師器碗はその名の如く、周防・長門地域に分布する土師器である。器形は吉備型土師器碗に似るが、回転台成形であることが大きな違いである。従来、山陰地方では防長型土師器碗の報告例はなく、既往の研究でもこの種の土器は中国山地を越えていないという見解が通説となっていた（森1992）。今回の防長型土師器碗の確認は、その通説を覆し、山陰地方への流入を示唆するものである。

本稿においては、大井谷Ⅱ遺跡と確認した土師器の概要について示す。詳細な検討は稿を改めて行う予定である。

2. 大井谷Ⅱ遺跡の遺構とその性格

大井谷Ⅱ遺跡は出雲市街の南東に位置し、斐伊川と神戸川の間を流れる大井谷川が開いた小規模な谷地形・大井谷の最奥部に立地する。大井谷の開口部には築山遺跡があり、6世紀後半の上塩冶築山古墳とそれを取り巻く円墳群や13～15世紀の塩冶氏に関わる屋敷地が確認される。また、大井谷をめぐる丘陵部には6～7世紀の上塩冶横穴墓群が造られる。

大井谷Ⅱ遺跡からは大量の遺物が出土した。

遺物の時期は、7～9世紀と13～15世紀がその中心となる。いずれの時期とも仏教に関わる遺物が多く、付近に寺院の存在が推測される。現在も同遺跡の北側には般若寺が立地する。

確認された遺構は13～15世紀に相当するものが多く、人為的に造成された平坦地の上に造られる。平坦地の西側には、南北4間×東西3間の東に庇をもつ掘立柱建物が確認された。東向きの建物と考えられ、その正面には角塔婆を建てた痕跡があるとされる。付近の遺構から、同時期の香炉・燭台・花瓶の三具足が出土しており、報告書では同遺構を寺院の本堂に相当するものと推定する（岸ほか2001）。そして、平坦地の東側、掘立柱建物正面には石積で護岸された池状遺構と石敷建物跡が確認される。掘立柱建物や池状遺構などは少なくとも15世紀には機能したとみられ、同時期に並存した可能性が高い。地形的な制約がある中で建物を東面させ、その西に園池をおく配置となることから、浄土思想の影響を受けた計画的な造作を推測させる。同様の遺構は出雲平野において類例がなく、今後遺構の再検討も必要となろう。

防長型土師器碗は掘立柱建物と池状遺構との間を南北に走る大溝03と、池状遺構の東側を南北に走る大溝04より出土した。大溝はともに幅7～8m、深さ2m前後の規模である。両溝の遺物には7～9世紀のものも含まれるが、基本的には13～15世紀のものが中心となる。その中には、龍泉窯系青磁・白磁・青白磁などの貿易陶磁器、備前焼・常滑焼・瀬戸焼などの国内陶器が認められる。

3. 出土した防長型土師器碗について

大溝03出土の土師器碗は1点（図1-①）。その法量は口径10.6cm、器高3.0cm、高台径6.6cmで、色調は浅黄橙色（Hue7.5YR4/8）である。体部は直線的に立ち上がり、断面形が四角形状

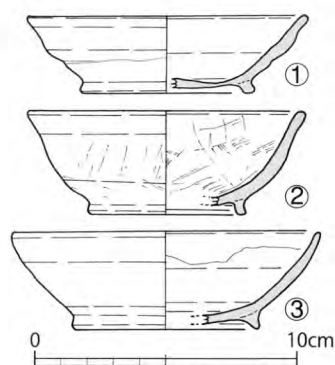


図1 土師器碗実測図 (1/3)

の高台を貼り付ける。成形には回転台を用いたと思われるが、切り離しの手法は不明である。切り離した後、底部をユビオサエで調整して、高台を貼り付けている。また、高台を貼り付け時の余分な粘土を体部外面へ引き伸ばし、高台外面に強いナデを施す。体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められる。

次に、大溝04出土の土師器碗は2点ある(図1-②・③)。ともに色調は灰白色(Hue2.5Y8/2)を呈し、緻密な胎土である。②の法量は口径10.6cm、器高4.0cm、高台径6.0cmである。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部をやや外反させる。高台は断面形が三角形状で、わずかに外反する。回転台による成形の後、体部下半をユビオサエで調整する。底部の切り離し手法は回転糸切りとみられる。高台を貼り付け後、高台および体部下半に再び回転台によるナデ調整を施している。また、体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められる。③の法量は、口径11.7cm、器高3.8cm、高台径7.2cmである。内面全体にわたり油煙が付着しており、灯明皿に使用されたとみられる。体部は丸みをもって立ち上がり、断面形が三角形状の高台を貼り付ける。高台は外側にやや開く。被熱のため調整が明瞭に残っていないが、②と同様に、回転台での成形後、体部下半をユビオサエで調整する。底部の切り離し手法は、高台貼り付け後のナデ調整のため不明である。体部内面には薄板状の工具によるナデ調整が認められ、口縁端部に同

様の工具によるヨコナデの調整が施される。

4. おわりに

以上、大井谷Ⅱ遺跡出土の防長型土師器碗について紹介した。その年代については、13～15世紀代と考えられ、遺構の年代とも矛盾しない。さらに詳細な検討を加えた上で、その他の防長型土師器碗と比較し、本資料の年代的な位置付けを考えたい。

中世の土師質土器については、陶磁器の大量流通に対して、小地域ごとに生産消費されていたとする見方が支配的とされる。ところが、吉備型土師器碗については、胎土分析の結果、その需給体制は小地域で完結するものではなく、瀬戸内沿岸部一帯を覆う形で展開していたことが明らかとなっている(鈴木・白石1996)。

今回紹介した防長型土師器碗については、上記の展開を示唆するものか、防長地域と大井谷に存した寺院あるいは寺院を支えた有力者とのピンポイントの関係か、更なる検討を要する。しかしながら、出雲地域の中世土師器をめぐる研究に、本資料が新たな視点を加えることは間違いないだろう。

【後記】 本資料の検討に際し、乗岡実氏(岡山市教育委員会)、福田正継氏よりご教示を賜った。記して、感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 岸道三ほか 2001『大井谷Ⅰ遺跡・大井谷Ⅱ遺跡』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ、出雲市教育委員会
- 森 隆 1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜についてー西日本の土器碗生産を中心としたー」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』3-54頁
- 鈴木康之・白石純1996「土師質土器碗の需給体制についてー草戸千軒町遺跡および周辺遺跡出土資料の分析ー」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県教育委員会